



『海外での“痛い”経験』



キング通信工業株式会社 代表取締役社長 茂木 俊介

最近では当たり前の光景になった都心で見かける海外旅行者の姿。渋谷のスクランブル交差点の様子を撮影する外国人など、外に出掛けていくと日本に非常に多くの海外からの観光客の方々が訪れるようになつたことを実感します。統計によると2016年には訪日外国人数は2400万人を突破し、日本人の海外渡航者数1710万人を大きく超えているとのこと。

海外旅行の手配も便利になりました。ネットサービスが普及し、窓口へ行く必要もなく、ホテル、航空券などを個人が簡単に手配できます。航空券やハウチャーも自宅のプリンターで印刷、もしくはスマートフォンを見せるだけで済んでしまいます。渡航先でも移動やお店探しも検索サービスを使えば目的地への行き方、電車の乗り換え、お店の評判までその場で簡単に調べることができます。

ネットによるサービスが発達してきましたが、海外へ実際にに行ってみるとその国の文化やそこで生活する人々に直接触れることができる、これが文字や写真、動画だけで見るのとは違った海外へ実際行く魅力かと思います。

今回はこのリレートークの場をお借りし、皆様は是非経験されない方が良い、私の海外での“痛い”経験をご紹介したいと思います。

海外出張での入院

その経験とは私が十数年前、前職で米国に出張した際、虫垂炎（盲腸）になり病院で手術を受け入院することになったことです。病院からの費用請求なんと400万円…

私は社内セミナー開催場所である米国カリフォルニアのオフィス近くにあるホテルで最終日を迎えておりました。役員の総括で終える頃に途中ずっと我慢していた腹痛に耐えきれず会場を飛び出しました。ホテルの部屋に戻り、痛み止めを飲みますが吐いてしまう状態で異変を察した現地の同僚がオフィス近くの比較的大きな病院に連れて行ってくれました。米国での医療費の不安が頭をよぎりながら病院へと向かいました。

時間外受付であったことは確かですが、到着した病院の受付には驚かされました。愛想の悪い受付の女性に言われた最初の一言は「医療保険を持っていのるか?」との質問。「どうしたのか?どれくらい痛いのか?」などではなく、治療費が払えるかどうかが最初の質問でした。治療費が払えなければ診てももらえない。米国では当然なのかもしれませんのが少し背筋が寒い思いをしました。

結果的には、私は会社で加入してくれていた法人クレジットカードの保険で医療費をカバーすることが出来ました。保険がなかったら…米国に国民皆保険がないという問題は大きな問題だと認識させられます。

私の“400万円”的二泊三日の入院生活は以下のような流れでした。

1日目 夕刻、時間外に病院を訪れる。

問診、レントゲン、CTなどを受ける。

時間外で専門医不在のため虫垂炎を疑うも正式な診断は翌日に。そのまま入院。

2日目 担当医師から虫垂炎と正式に診断。手術を受けることに同意。同意書等書類手続き。

夕刻、腹腔鏡による手術を受ける。

3日目 朝食を取り、診察。特に異常もなく午前中に退院。

実は、米国の病院でご担当頂いた医師、看護師、各スタッフの方々の対応は非常に素晴らしい、手厚いサービスを受けることができました。入院中も夜間も含め何度も状況をきめ細かくチェックし、配慮を感じました。また、当然かもしれません、検査、使用する薬、手術のリスクなどをしっかり説明してくれました。

入院中の一番問題だったのはこの事を理解する私の英語力で、中学校の英語の教科書に出ていた「虫垂炎」の単語一つを覚えていたことだけでも勉強しておいて良かったと思えるほどで、聞きなれない医療用語に、医師とやり取りするためにお腹の痛みだけでなく、電子辞書とも格闘していました。話を聞きつけて、駆けつけてくれた現地の友人が色々助けてくれたことは、今でも感謝の気持ちでいっぱいです。

手術翌日の朝やっと、食事を食べてよいということになりました。食事はレストランと変わらない何ページにも渡るメニューが渡され注文を聞かれました。メニューにはステーキまで選べるようになっているのです…盲腸の翌日に何を食べて良いのかもわからず(そもそも手術の数時間後に食べてよいのかも)、医師に確認すると「ステーキ以外なら何でも良い」と言われ、自分なりにお腹に優しそうなものを選んで注文しました。

語弊はありますが非常に快適な入院生活でした。

帰国後の費用請求

さて、帰国してから治療費の請求について保険会社から連絡がありました。法人カードの付帯保険でカバーできる治療費は300万円まで。保険会社から電話連絡で、病院からの請求があり400万円であることが伝えられました。

また、保険会社はこれから病院と減額交渉を行うと伝えてきました。減額交渉???医療費の妥当性について請求書を確認し交渉するということのようです。このままだと、100万円を個人で支払わなければならない状態ですのでありがたかったのですが保険会社は米国の病院では担当をした医師、放射線科、麻酔科など請求が全て担当毎に縦割りでバラバラになっていますので、それぞれの担当部署と請求について確認し減額交渉してくれたのだと思います。

結果は請求額308万円!最初の請求がなんだったのかと思いますが、それ以上に100万円の支払いが8万円になった安堵感の方が大きかったのを覚えています。

痛感する日本の有り難さ

この経験を通して“有り難さ”を感じたことの第一はやはり「日本の医療制度」です。高齢社会が更に進む日本で、誰が医療費をどれくらい負担するかという点は大きな課題ではあります。しかし、明日は我が身。不安なく医療が受けられる日本の医療制度がいかに有り難いものであるかを実感させられました。

第二に万が一の時に頼りになる「保険」の存在です。恐らく、個人で支払うことになっていれば金額の問題だけでなく、減額交渉などができるることは知らなかったでしょう。また、交渉も難しかったでしょう。クレジットカードに付帯される旅行保険はその旅の航空券の支払いが当該カード決済となっていることなど適用に条件がある場合がほとんどです。また、死亡保障が数千万円あっても、治療費は非常に限られた金額であることも多くの保障金額にも注意が必要です。

第三に「人」の“有り難さ”です。日本でも手術などした事がなかった異国の地でサポートしてくれた同僚や友人には本当に世話になりました。また、保険があって、仕事とはいえ、病院の方々が深夜を含め対応してくださいましたことに非常に安心を覚えました。

私たちが提供するセキュリティシステムもある意味“保険”的なもので、何も事件が無いことが一番良いことです。提供させて頂くセキュリティシステムの存在が万が一に備えるお客様への安心を提供できる存在でありたいと思います。IoTなど、システムによる省人化が期待されています。しかしそのようなシステムを運用する中でも最後には必ず人が何らかの形で重要な役割を担うのだと思います。これからも、セキュリティシステムのみならず、セキュリティシステムに関わる方々との関係を大切にしながら、日本の安心・安全のために共に貢献させて頂ければ幸いです。